

顔に関する部首



口

古は、十と口^レの会意字で、“十代にわたって口から口へと伝えられた”ことを表わした字です。“ふるい”“むかし”という意味に使われます。古色。古人。

否は、“違^レう(不)と言^フう”“いなむ”ことを表わした、不と口^レの会意形声字。音は不^フが変化してヒ。否認。可否。

咲は、口と美(シヨウ)との会意形声字。“口を開いてわらう”のが本義。「花咲」は花が笑っているのが本義で、わが国では、これを「花咲く」と読んだために、“さく”の訓が生まれました。

目

看は、尹(手の変形)と目^レの会意字で、“目の上に手をかざしてみる”ことです。「見」が目の働きとしての“みる”ことを表わすのに対して、「看」は、見ようという意志を以て“みる”ことを表わしています。従って、「見」は、「見える」という使い方はできますが、「看」は「見える」という使い方はできません。また、“面倒をみる”意味に使います。看護。

相は、“木の上にのぼって見^ルる”という意味の字です。広く、遠くまで見ようとしてみることで、見よりも深い意味を持っています。“さぐる”こと。人の容貌をさぐることを「観相」と言います。政治をみ^ルることから、“君主を輔佐する”意味にも用いられるようになりました。首相。

盲は、“目^レの力を亡^ウう”という意味の字で、めくらを表わした会意字です。音は亡^{モウ}。

耳

取は、“耳^レを取る”という意味の会意字です。中国では、敵をたおした場合、重い首の代わりに耳を取って証拠としました。音は手^{シュ}。

聞は、“門^レに口^レを寄せてと^クう”(問)のに対して、“耳^レを門^レに寄せてき^クく”こと。音は門^{モン}、漢音はブン。

聳は、物音のする方向に“耳を従わせる”という意味の会意形声字で、音は従^{ジュウ}。“耳をそばだてる”ことから転じて、“山のそばだつ”意味に用いられます。

自

自は、鼻の象形で、“はな”が本義ですが、自分を指さす時に、鼻をさしますので、“わたくし”の用法が生まれました。「自分」というのは、“私の分け前”“私のもの(英語の mine にあたる)”という意味の言葉です。

ついでに言いますと、「私」は、“ム^{わたくし いね}の禾”という意味の字で、「自分」に当たる言葉です。「ム」は^シで鼻の象形で、自と同音同義の字です。「公」は、「私を分(八)割する」意味の字です。

臭(旧字は臭)は、“犬の鼻”で、“におい”または“かぐ”意味を表わしたものです。

鼻は、自が私の意味に転用されたために、𠂔(毘)を加えて作った形声字です。

面

面は、自の周囲に、顔の輪郭を加えて、“かお”の意味を表わした

字です。「洗面」。転じて、「表面」「地面」など“おもて(顔を表わす古語ですが、今では表の意味)”の意味に使われます。

頁

頁は、首(ハ)から上“あたま”を表わす部首です。旁としてよく用いられます。昔から「大貝」の名で呼ばれますが、「顔^{かお}旁^{つくり}」と呼びたいものです。

顔は、顔が本字です。文と^{あや かざり}と^{ガン}との会意形声字である彦(美しいが本義の字、男子の美称としてよく用いられます)と頁との合字。音は彦^{ガン}です。

頭は、豆粒のようにまるいという意味の豆と頁との会意形声字です。音は豆^{トウ}です。

頂は、丁^{チョウ}と頁との会意形声字で、“頭のいただき”が本義です。目上の人から物を受け取る時は、頭の^{いただき}頂の高さにまで手を上げますので「頂戴する(いただく)」と言うのです。「山頂(山の頂)」は転用です。

順は、低きについて決して高きには向かわない川と頁^{あたま}との会意字

です。“頭を下げてすなおに従う”ことです。音は川が変化したㄩ (巡) (馴) です。

項は、後の意味の工と頁との会意形声字で、“後頭部”が本義の字です。急所ですから“大切な所”の意味に使われます。「項目」は、書物の大切な所の意味で、全体を小わけする場合、最初の大まかな方を「項」、それをさらに小わけしたものを「目」と言います。

首

首は、頁の上に髪あたまの毛を加えた字です。“あたま”が本義です。元首。頭首。戦場で、敵の首を取る場合、切り落とす所が頸くびですので、首が頸の意味になりました。

梟

梟は、首を逆さにした形です。“さらし首”の象形です。木にかけられるので、“かける”という意味を表わしたものです。梟の旧字体は「縣」です。系は、首をかけてつるための糸を表わしています。秦の始皇帝の時、縣を、行政上の区画の名称にしましたので、“かける”という意味の字は、“心にかける”という意味の「懸」で表わしています。「懸念」は、ケと短かく発音されます。“心にかける”“気がかり”という意

味です。

懸命は、“命がけ”という意味の言葉です。一つのことに命がけになるのが「一所懸命」です。今では、なまって、「一生懸命」という言葉になっていますが、これでは意味が通じません。